

て、今後さらに、以下の3項目について、改良、検討を重ねて行きたい。

1. 材質の軽量と簡素化及び各部調整の為のストッパーの改良。
2. 斜面スライドストッパーが、或る患者では、ブレーキレバー操作の障害となる点。
3. テーブルが回転した時の強度と角度維持の方法について。

6) 車 椅 子 の 選 び 方

国立療養所 再春荘

境 勇 祐 上 野 和 敏
泉 純 治 岡 元 宏

DMP患者は歩行不能以後車椅子生活が多くなる。現在まで病状に良く適合した車椅子の選び方については、萩島先生等の報告がある。そこで一般的な事項について記述してみますと、ハンドリムは大きいもの、安全ベルトはゆとりのある丈夫なもの、フットレストは充分にふんばれる位置に取りつける、シート幅は腰幅に5cm位加える、アームレストは調節可能にする等である。歩行不能者の筋力は下肢、軀幹の筋ばかりでなく、車椅子運転の主力になる上肢筋も筋力低下がある。そこで残された筋力で、障害度に応じた車椅子の開発が必要である。そこで我々は、車椅子開発の前段階として現在使用している2種類の車椅子、即ちスタンダード型及びトラベラー型車椅子と障害度との関係について、どの車椅子が適しているか検討した。

現在当荘に入所中の患者14名について調査した障害度分類では、Ⅱ-6 5名、Ⅱ-7 4名、Ⅱ-8 5名である。

<方 法>

10mの直線、蛇行、登坂コース及び段差乗越えの四段階について、測定を行なった。障害度Ⅱ-6の患者では、直線及び蛇行に要する運転時間について測定したスタンダード型及びトラベラー型では、それぞれ直線に運転時間が短かく、蛇行には長時間を要した。運転姿勢は両型ともにハンドリムを握り、楽に運転していた。半年後の測定でも変化はみられなかった。また、登坂及び段差乗越えでは、前かがみになりフットレストに足底を押しつけて運転していた。この段階では比較的に上肢の機能が残されており、トラベラー型よりもスタンダード型車椅子の方が、運転しやすいようである。

障害度Ⅱ-7.8の患者では、直線及び蛇行に要する運転時間はスタンダード型よりも、トラベラー型車椅子の方に時間が短かく、スタンダード型では運転できない者もあった。

一方登坂では、障害度Ⅱ-7 4名 と Ⅱ-8 2名が可能であり、3名は不能であった。段差乗り越えは、障害度Ⅱ-7 4名 のみ可能で、Ⅱ-8になるとできない。この時期になると、上肢の機能もほとんどなく、身体各部の拘縮や変形のため運転しにくいと訴える。一度処方された車椅子は生涯使用するものであり、障害度に応じて自由に組替えや、調整が容易であるように研究し開発したい。

7) スライドストレッチャーの使用経験

国立療養所 再春荘

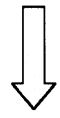
米丸瑞子	田中嘉子
久米静代	阿南薫
岡崎浩子	佐藤美代子
森下茂子	

スライドストレッチャーの改良点を取り上げながら、使用経験を報告します。

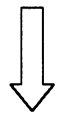
まず始めに、プレートが斜め下にスライドします。これによってベッドとストレッチャーの間で、患者の移動が容易に行なえるかを試みました。ベッドにストレッチャーを並べ、スライドさせて見ますと、その間に6~10cmの段差が生じます。これはストレッチャーの高さが調節出来ない為におこる現象なのですが、この高さの違いの為にシーツ類を利用しても患者を滑めらかに移動させる事は出来ません。診察台及びエレベートバスへの移動についても同じ結果でした。又ストレッチャーに患者を寝せたままスライドさせる場合、体重がかかる為に操作に力を要すると共に急にガタンと傾き、患者が転落する危険があります。滑めらかにスライドするように工夫する必要があります。

次にプレートが強化、プラスチック製である為に厚さが薄く、クッションも柔らかいスポンジ使用であり、カバーも滑めらかなビニール製の為、外見的にもスマートで全体的に軽くなっている。中央部は丸みをもった船底型で、患者を乗せた時安定感があり、移動も楽である。しかし身体変形強度の患者は、かえって密着せず空間が生じ不安定な状態となり易い。

又プレートの幅が中央部だけ広く、両端は細い為に、自分で四肢を保持出来ない筋ジス患者では、時々手足の落下が見られ危険である。プレートの幅は全体的に広い方が安全であると思われる。背もたれの角度も自由に変える事が出来るが、これは患者の要求に応じて様々に調節可能であり、非常に便利である。しかし角度が高すぎると棚がない為に横に倒れ易くなり、自分で坐位保持不能の患者では、水平に近い角度調節時の振動が直接患者の背部に伝わる為に、滑めらかに調節出来るよう工夫す



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



DMP 患者は歩行不能以後車椅子生活が多くなる。現在まで病状に良く適合した車椅子の選び方については、萩島先生等の報告がある。そこで一般的な事項について記述してみますと、ハンドリムは大きいもの,安全ベルトはゆとりのある丈夫なもの,フットレストは十分にふんばれる位置に取りつける,シート幅は腰幅に 5cm 位加える,アームレストは調節可能にする等である。